社会技術研究開発事業
令和６年度研究開発実施報告書

ＳＤＧｓの達成に向けた共創的研究開発プログラム

ソリューション創出フェーズ

「ピアサポートの価値創造と普及による

新しい医療社会モデル構築にむけた展開」

研究代表者　北原 秀治
（東京女子医科大学　特任准教授）

協働実施者　宿野部 武志
（一般社団法人ピーペック　代表理事）

目次

１．研究開発プロジェクト名 2
２．研究開発実施の具体的内容 2
２‐１．目標 2
２‐２．実施内容・結果 7
２‐３．会議等の活動 12
３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況 13
４．研究開発実施体制 13
５．研究開発実施者 15
６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 16
６－１．シンポジウム等 16
６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 16
６－３．論文発表 16
６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 16
６－５．新聞報道・投稿、受賞等 16
６－６．知財出願 17

１．研究開発プロジェクト名

「ピアサポートの価値創造と普及による新しい医療社会モデル構築にむけた展開」

２．研究開発実施の具体的内容

２－１．目標

（１）目指すべき姿

１．社会課題と目指すべき姿（ビジョン）

（１）地域における社会課題

ピアサポートの効果がすでに報告され、ピアサポート体制加算も導入されているにも関わらず、認知、普及がいまだに不十分であり、評価も非常に低い。コロナ禍において当事者同士の接触が規制されさらに失われてしまったことはもちろんであるが、それ以前から各地域において以下のような社会課題が存在する。

1. 情報不足: ピアサポートについての情報が地域の住民や関係者に対して不十分であり、その存在や利点についての認識が非常に低い。**2.社会的スティグマ:** 心理的な問題や困難な状況（疾患により）に直面している人々が、他者に自分の問題を打ち明けることに対して社会的スティグマや恥感を感じ、ピアサポートへの参加意欲が低下している。**3.地域の支援ネットワークの未発達:** ピアサポートを実施するための組織やネットワークが地域にあまり存在せず（機能せず）、参加者や適切なプログラムの提供が困難な状況である。

これらの課題に対処するためには、以下のような取り組みが有効であると考える。

1.意識啓発と情報普及: 「ピア」は患者同士だけでなく、**実は社会に溢れている**という意識啓発、地域の住民や関係者（当事者も含む）に対してピアサポートの存在と利点についての情報等を、本研究で遂行するシナリオの成果とともに、最新ICTを用いて広く提供する。**2.スティグマの軽減:** 心理的な問題や困難な状況に対するスティグマを軽減するため、本研究の成果をエビデンスとして発信し、理解と共感を促す。ピアサポートの効果（価値）が実証できれば、参加への抵抗感を減らすことができる。**3.地域の連携強化:** 学校や地元の組織、団体と協力し、ピアサポートの実施環境を（地域で）整える。学生や地域ボランティアを育成し、ピアサポートの提供者として活動できるように支援する。**4.ニーズと状況の調査:** 地域のニーズや状況を正確に把握するために、アセスメントを行う。ステークホルダーにアンケート調査、フォーカスグループディスカッション、地域の専門家や関係者とのインタビューなどを通じて、必要な支援領域や具体的なニーズを特定する。

本プロジェクトを先行実装してきた３地域、①帯広、②福岡、③東京（世田谷）は「実証試験の実施地域」や「多地域展開に向けたモデル地域」として有効である。<u>①ソーシャルバザールが帯広である理由</u>として、**1.寒冷地域であること：**1月の平均気温が−5.5℃、最低気温が−20℃になる冬季シーズンは交通の便が悪く、対面でのピアサポートを行うことが困難であるため、DXが必要であった。**2.地域のサイズ：**帯広市は人口17万人(十勝圏域で36万人）であり、高齢化率も30%と迫っている。その中での当事者数の予測も含め、本プログラムを行うサイズとしては行政も動きやすくモデル地域とし

ては最適である。**3.NPO法人ポラリスの所在地：**ポラリスは非常に活発にピアサポートを行なっており、地元密着度も高い。そうした団体を中心に地域の担い手として実装を行うことが成功への鍵となる。②WithUsが福岡である理由として：**1.福岡医健・スポーツ専門学校の存在：**シナリオ創出フェーズでの実装実験に手上げしてくれた学校であり、福岡県作業療法士協会理事も努める永田氏（教員）が協力してくれる点で、福岡全域での展開が非常に容易である。**2.地域の担い手の存在：**研究分担者の葉山氏が理事を務めるNPO法人学びあいの所在地であり、ピアサポートを積極的に行なっていた団体だからこそ、WithUsプログラムが生まれた経緯もあり、本プログラムを広げるスピード感があり、地域の担い手となっている。**3.豊富なネットワーク：**研究代表者の出身地でもあり、葉山氏や永田氏含め、福岡県作業療法士協会のサポートもあり、本プログラムを進めるためのステークホルダーが容易に巻き込めるネットワークが形成されており、モデル地域としては最適である。③こえを”かち”にするプロジェクトが東京（世田谷）である理由として、**1.エコシステムがある：**技術開発を務める分担者の三木氏、AIやIT担当の毛利氏の拠点でもあり、周囲には研究代表者の東京女子医科大学、慶應義塾大学、東京大学が存在し、実際にピアサポートを体験しながらDX研究開発を行っていく上でのエコシステムが整っている。**2.一般社団法人ピーペックの所在地：**協働実施者である宿野部氏の拠点でもあり、ピアサポートであるじんサポなどを実施している。普及という点でも元来より活発におこなっていた一般社団法人ピーペックの所在地から本プログラムを発信することは円滑に進めるためにも重要である。これらを踏まえて、ピアサポートが普及してない地域のニーズと状況を把握するための方法としては、
1.アンケート調査: 多地域展開する予定の地域の住民や関係者（当事者団体）に対して（過疎地域～都市部まで）、ピアサポートに関する意識やニーズについてのアンケートをCグループが実施、参加意向や必要な支援領域、現在のサポートシステムの認識などを調査する。**2.フォーカスグループディスカッション:** 地域の関係者や専門家を対象に、ピアサポートに関するディスカッションを調査グループが行う。ニーズや課題、具体的な支援方法についての意見を収集する。**3.インタビュー:** 地域の関係者や専門家と個別に面接やインタビューを行い、地域のニーズや課題、既存の支援システムの強みや課題についての情報を収集する。**4.データ分析:** 地域の保健統計や社会調査データを本研究に参加する楠田氏（医療情報学）が分析し、地域の健康や福祉に関する課題や傾向を把握する。これらの手法を組み合わせて、地域のニーズと状況を綿密に把握し、研究協力者である藤井氏（弁護士）と相談しながら、当事者団体がうまくマネタイズできるピアサポートプログラムの設計と展開（DXによる）および普及に役立てていく。

（２）目指すべき姿（ビジョン）

ピアサポートDX化の価値創造と普及による新しい医療社会モデル構築にむけた展開として、住民、関連する専門家、地域の関係者（自治体、保健センター、NPOなど）、そして患者・当事者が主な参加者となり、学校、自治体（地域の保健センターなど）、NPO法人などが主導的な役割を、そして互いに連携し、ピアサポートの実施に向けた協働パートナーシップを構築する。実施地域としては、当事者団体の所在地を中心に（必要な場所では当事者団体を設立し）、これまでのシナリオを地域の特性やニーズに合わせたピアサポートプログラムパッケージに組み込み、コーディネーターや担い手と共に地域の（患者・当事者の）課題解決に取り組む。受益者は心理的、身体的な問題や

困難な状況に直面している地域の住民（いわゆる患者・当事者）が主な受益者となり（高齢化社会において誰しもが受益者となる可能性がある）、特に、若者や高齢者、孤立している人々など、支援を必要とする人々に焦点を当て、**誰一人置き去りにしない社会**を目指す。また、患者と医療者を超えて通用する活動や技術としても社会に拡げていきたい。提供する支援内容として、ピアサポートDXプログラムパッケージである「ソーシャルバザール」「WithUs」「こえを”かち”にするプロジェクト」を通じて、受益者に対して以下のような支援を提供する。**1.経験共有と相互理解:** 同じ経験や課題を抱える参加者同士がICTを利用して集まり、体験や感情を共有し、相互理解を深める。**2.情報提供とアドバイス:** 参加者（当事者）に対して、関連する情報や具体的なアドバイスをピアサポーターから提供し、問題解決のサポートを行う。**3.社会的なつながりの促進:** 地域内のつながりや支え合いのネットワークを構築し、参加者（当事者）同士が支え合えるような環境を作る。そして共創的な社会像の実現を目指すために、以下のような具体的な取り組みが必要である。**1.地域ニーズの把握:** Cグループが行うアセスメント手法を活用し、地域のニーズと課題を詳細に把握、アンケート調査やフォーカスグループディスカッションによって、参加者や関係者の声を反映させる。**2.プログラム開発と実施:** Aグループが行う地域のニーズに基づいたピアサポートプログラム「ソーシャルバザール」を実施、多地域展開をし、抽出された課題を「WithUs」の教育に取り込み、解決策を提案する。**3.資源の活用と提携:** Aグループが、大学や地域の組織、団体が持つリソースや専門知識を活用し、プログラムの実施に必要な、支援を提供、地域の保健センターやNPOとの提携を強化し、人材や施設の協力を得る。**4.評価と改善:** Bグループが上記実施したプログラムの評価（定量化）を行い、参加者（当事者）のフィードバックや成果を踏まえて改善を図る。継続的なモニタリングと評価により、プログラムの効果や課題を把握し、より良い支援体制をAおよびCグループと構築する。これらの取り組みによって、PDCAサイクルが効率的に回り、地域でのピアサポートの普及と発展を促進する。本パッケージを運用できれば、当事者（自身の経験を社会に活かすという意味での社会貢献）、当事者団体（運営資金調達、知名度向上）、スポンサー（患者参画研究開発、CSR活動）、本事業の運営チーム（資金調達）など、各ステークホルダーが得られるものも明確になり、病をもちながら生きる「**新しい医療社会モデル**」が実現する。

（２）研究開発プロジェクト全体の目標

１．研究開発プロジェクト全体の目標

シナリオ創出フェーズにおいて、**3つのシナリオ（ソーシャルバザール、WithUs、こえを”かち”にするプロジェクト）を完成させた。**これは「患者や医療現場に足りないもの」を起点に、**価値の「創造」「共創」「創出」**という３つの領域とその活動である。ソーシャルバザールは地域社会でのピアサポートを自治体や企業を巻き込みながら促進し、ワークショップやディスカッションを開催、当事者達が情報共有をする。WithUs は教育現場で障がい者と学生がテクノロジーを利用し協力して学び合う環境を作り、ソーシャルバザールで出た課題をフィードバックさせるものである。そしてその経験が当事者達の社会への貢献となるものである。こえを"かち"にするプロジェクトは ICT、AI や機械学習を用いてピアサポートの効果を定量化できるようのデバイス開発を行いながら、広く普及を目指す。これらのシナリオはピアサポートを多方面から支援し、**それぞれが相互作用をも**

ち、価値を高めることを目指している。本研究ではこの３つのシナリオをパッケージ化（マニュアル制作、定性、定量から標準化を目指す）し、医学ｘ工学ｘ社会学研究の連携＋当事者の co-creation で社会実装および多地域（他団体）展開（年に２団体にパッケージを提供）し、個人（ミクロ：ピアサポーターDX プロデューサー（仮称）の育成）から組織（メゾ：当事者団体の活動を活発化、収益を上げる）へ、そして社会（マクロ：年に 1 度以上の地域イベント開催、年に 1～2 校の教育を取り入れる学校の獲得）へと拡充する。最終的に国（メガ：シンポジウム開催、アウトリーチ活動、年に 1 度以上の行政、政治を巻き込んだ勉強会）へと社会変革を進めるために、本プロジェクトをサステナブルに継続するための非営利法人を設立し、研究期間終了後も地域への定着、普及をめざす。この結果がピアサポートの価値共創、普及へとつながり、病いを持ちながら生きていく、誰一人取り残さない「新しい医療社会モデル」を作り上げる。本プロジェクトは各グループ緊密な連携を取りながら遂行していく。

２．実証試験の目標

本研究プロジェクトでは、ピアサポート DX 化を通じて価値を高め、全国への普及を目指している。本パッケージは以下のように実施される。まず、個人から組織レベルでのつながりを強化するために、「ソーシャルバザール」を中心として多地域に展開し、地元団体の協力を得て情報交換や悩みの共有を行う。具体的な目標（KPI）として、帯広では成熟のために 1 回、多地域で年に 2 回開催し、年に 2 人の就労支援、80%以上のアンケートによる満足度の向上を目指す。次に、組織から社会レベルへの広がりを目指すために「WithUs」プロジェクトを中心として進める。関係学校と協働し、医療専門職の教育を行い、新しいサポート体制を確立する。具体的な目標としては、年に 1～2 校での教育プログラムの広がり、7 回の講義カリキュラム、他職種への教育拡大（年に 1 職種）、および教員への教育を設定する。さらに、AI を用いた定量化を目指す「こえを“かち”にするプロジェクト」では、実際のピアサポート現場で技術開発を進め、その効果を定量評価する。具体的な目標としては、音声解析、言語解析の精度向上を含め、初年度に 30%の完成度を達成し、最終年度には製品化を目指す。各フェーズにおいて、イベント開催、教育プログラムの実施、技術開発などを通じて、ソーシャルバザール、WithUs、こえを“かち”にすることをパッケージ化して他当事者団体へと展開し（２団体/年）、リアレンジしながらその地域に根ざすよう、持続可能なビジネスモデルの確立を図る（巻き込んだ当事者の人数（50 人/年））。また展開先の当事者団体の自律を目指し、人材育成としてピアサポート DX プロデューサー（仮称）を育成し（各団体に 1 人）、率先して展開先の当事者団体の運営に参加できるよう目指す。

３．事業計画作成の目標

本研究開発プロジェクトは、ソーシャルバザール、WithUs、こえを”かち”にするプロジェクトをパッケージ化し、当事者団体へと展開するものである。これは「患者や医療現場に足りないもの」を起点に、価値の「創造」「共創」「創出」という３つの領域とその活動であり、本パッケージをうまく運営することで、ピアサポートを普及し、当事者団体の持続可能な運営を目指す。ソーシャルバザールは地域社会でのピアサポートを自治体や企業を巻き込みながら促進し、ワークショップやディスカッションを開催、当事者達が情報共有をする。WithUs は教育現場で障がい者と学生が協力して学び合う環境を作り、ソ

ーシャルバザールで出た課題をフィードバックさせつつ、デジタルを活用したものである。そしてその経験が当事者達の社会への貢献となるものである。こえを"かち"にするプロジェクトはICT、AIや機械学習を用いてピアサポートの効果を定量化できるようのデバイス開発を行いながら、広く普及を目指す。これらのシナリオはピアサポートを多方面から支援し、**それぞれが相互作用をもち**、**価値を高めること**を目指している。本研究では**医学x工学x社会学研究の連携＋当事者のco-creation**で社会実装および多地域（他団体）展開し、**個人（ミクロ）から組織（メゾ）へ**、そして**社会（マクロ）へ**と拡充する。最終的に**国（メガ）へ**と社会変革を進めるために、本プロジェクトをサステナブルに継続するための非営利法人を、研究開発終了間際に設立し、研究期間終了後も引き続き地域への定着、普及、そして当事者は再び当事者になる可能性があるということも踏まえた若手人材育成（本研究に参加する当事者の方々をロールモデルとした）をめざす。この結果が**「新しい医療社会モデル」**を作り上げると確信している。もっとも問題となる資金調達としては、研究機関終了後は、成熟した３つのシナリオをパッケージ化して、サブスクリプションモデル等を導入し、月額や年額料金で当事者団体が使用できるサービスの提供を考えている（このパッケージを用いて当事者団体はマネタイズを目指す）。また、人材育成という観点から、専門職教育に本パッケージの一部を取り入れてもらうことで学校側からの講師料の徴収なども可能と考える。また、イベント等における企業スポンサーシップとして広告スペースを提供することもできる。医療機関や企業向けに研修やコンサルティングサービスを提供し、これまで収集したデータの分析結果等を販売（個人情報は抜いて）する。もし、なにかアイデアが生まれ、提携プロジェクトなど行う場合は、資金調達にクラウドファンディングを利用する。さらに、技術開発したものについては、ビジネス戦略をもとに販売を行う。これらの方法を組み合わせることで、持続可能なビジネスモデルを構築し、多地域展開を支援する。

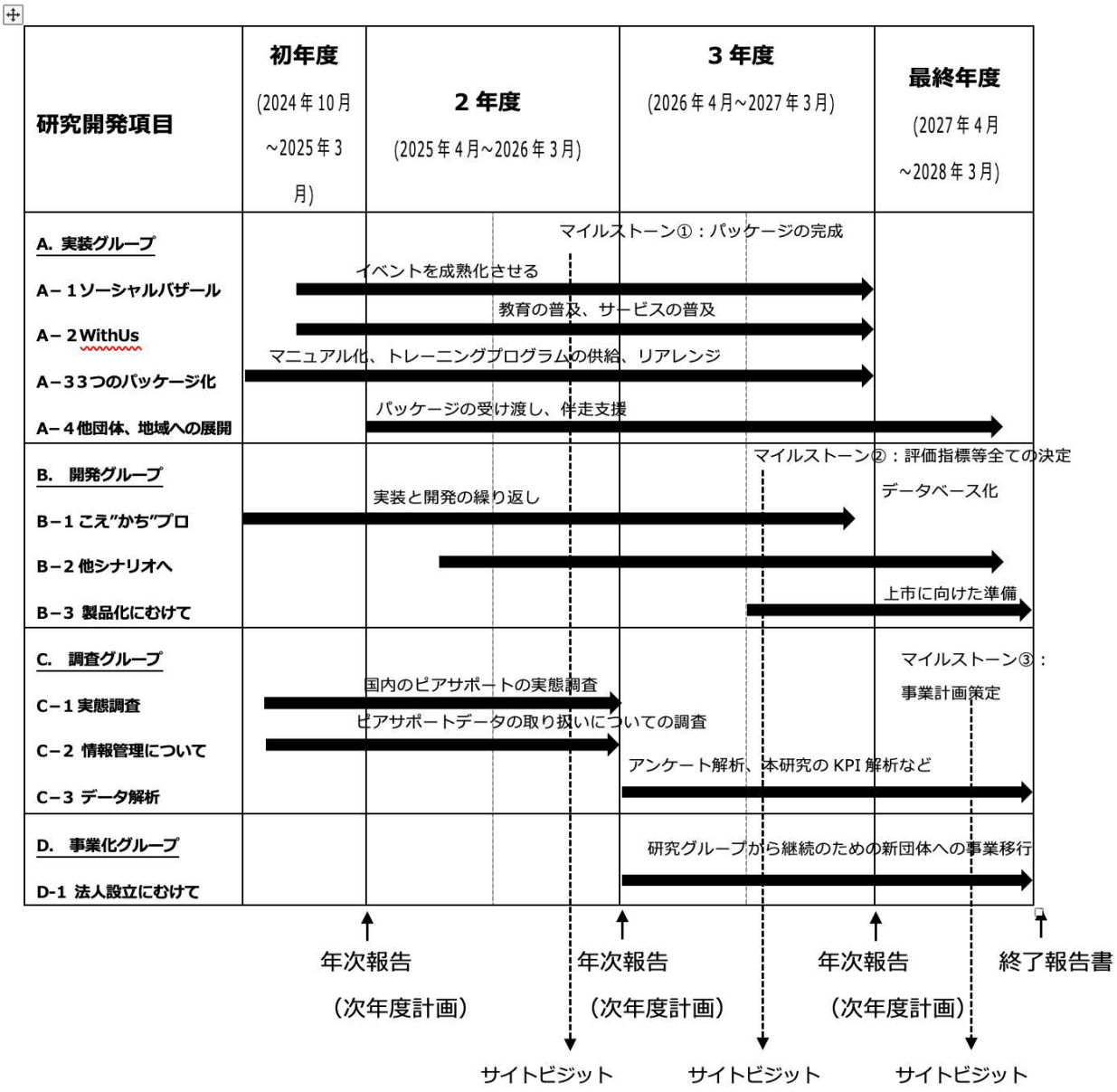
４．その他の目標

社会を動かすために、行政や政治を巻き込み、勉強会やシンポジウムを２年目、３年目に行う。

２－２．実施内容・結果

（１）スケジュール

研究開発期間中（42ヶ月）のスケジュール



（２）各実施内容

A. 実装グループ：

（A-1）パッケージ化およびリアレンジできるよう、帯広でソーシャルバザール（ピアサポートの情報共有の場）を継続（成熟化および細分化）する。本計画に関しては、2月6日に成熟化およびアニュアル化を目的として帯広で「十勝発、マイノリティと共に生きる社会」というソーシャルバザールを(若手人材中心に)開催する。今後の展開として関係してくる帯広畜産大学、十勝財団、帯広市も参加する。

実施内容：サイトビジットとして2月6日に帯広で「十勝発、マイノリティと共に生きる社会」というソーシャルバザールを開催した。今後展開に関係する帯広畜産大学、十勝財団、帯広市清水町（社会の関与者）も参加した。

（A-2）滋慶学園グループおよび国際医療福祉大学への展開の準備、実践に入る。

滋慶学園グループとは定例会議を設定しており、福岡、京都、名古屋校合同での本研究に関するイベントを開催予定である。国際医療福祉大学は現在カリキュラム委員会が設定され、展開準備がすすんでいる。また、本目標以外に新たに他地域展開先として、WithUsプロジェクトを中心に九州栄養福祉大学（北九州市小倉区）、麻生リハビリテーション大学校（福岡市博多区）との話し合いが３月に行われる予定であり、４月以降、北九州の当事者団体への展開（三つのシナリオ）、福岡における他団体への展開の準備をすすめている。さらに、４月以降になるが、鈴鹿医療科学大学（三重県）およびその地域への展開構想や、現在進行形の東京都港区の「みなと高次脳」への展開も順調にすすんでいる。

実施内容：北九州市小倉区（九州栄養福祉大学）、福岡市博多区（麻生リハビリテーション大学校）での展開を開始した。準備期間とし、講義に参加してくれる方々（現地当事者、現地企業、議員：社会の関与者）との調整。会議を行なった。また三重県鈴鹿市（鈴鹿医療科学大学）とは来年度の開催を目指し会議を開いた（豊田学長：社会の関与者）。また大分県別府市での他地域展開の準備も進んでいる。

（A-3）他団体、地域への展開を目指すために、３つのシナリオのパッケージ化の準備を行う。まず当事者団体用にガイドライン作成を開始し、必要なリソースをリストアップする。これまでの成功事例などをまとめたドキュメントも用意する。技術的な準備としてはデジタルツールやプラットフォーム（メタバースなど）のセットアップガイド、データ管理・評価システムの使用方法を説明するマニュアルを準備する。

各シナリオの詳細やイベント開催の手引きなど、各ステークホルダーへのインタビューを行う準備をしており、最終年度にマニュアル化から書籍化を目指す準備をすすめている。

実施内容：帯広とかち地域での他地域展開を成功例として、ヒアリング、マニュアルのドラフト作りを開始した。現在運営に携わる当事者の方々に細かくヒアリングを行っている。

B. 研究開発グループ：

（B-1）ピアサポートのAIによる解析、評価において2つの課題が明らかになっている。1つは利用可能なデータの制限。ピアサポーターおよび利用者は、会話内容の詳細を第三者に聞かれたくない。もう1つは評価の侵襲性である。ピアサポートの定量的評価は、将来的な報酬化、効果実証に必須ともいえるが、ピアサポーターを傷つけることも予想さ

れる。これまで模擬ピアサポートにおいて、会話ではなく、声の分析定量化を行っている。解析モデルの高精度化に加え、実装のために協働実施者と連携し、解析モデルを評価する。同時に、定量化の侵襲性を最小に、効果を最大にするための指針を検討している。
実施内容：ロールプレイングの模擬ピアサポートに対して、エンゲージメント、感情、沈黙、ならびにこれらの変化量を特徴量として解析を行った。その結果、エンゲージメント、ならびに感情の変化が、ピアサポートの効果に対して影響が大きいことが明らかになった。

C. 実体調査グループ:
（C-1）これまでアンケートやインタビューによる調査でピアサポート実態を把握し、効果や課題について分析してきた。その結果から見えてきた、継続や継承という課題、専門職の関与への希求、疾患や障がいによる差異や同質性、ピアサポーターのトレーニングの必要性などに関して、さらに踏み込んだ調査を行い、当事者のニーズや「ホンネ」のリアリティを明らかにし、ピアサポートの体制づくりに寄与するエビデンスを作っていく。また、国内では福祉の分野では先行してピアサポーターの養成並びに資格化が進んでおり、海外ではピアサポートに類似する制度の導入（社会的処方やAdult Foster Careなど）が実践されているので、その状況を詳細に把握していく。本研究には新たにお茶の水女子大学の太田副学長、土山准教授および3年生の学生が参画することとなった。とくに土山准教授はテキストマイニングが専門であり、これまでのインタビュー解析、今後のアンケート調査やインタビュー解析を分担者の細田や協力者の楠田と共に進めていくこととなった。また海外の事例の把握として、デンマークの高次脳機能障害者のピアサポートグループの実践が、体系的で持続可能なモデルとなると考えられるので、視察を踏まえて本プロジェクトへの示唆を検討する。
実施内容：これまでのインタビュー結果をもとにテキストマイニングを開始するためのふるい分けをおこなっている。その際に専門用語が多く存在することがわかり、ひとつずつその意味の確認を行なった。同時に、インタビュー結果を基本的に修正版グランデットセオリーの方法を用いて分析する作業も進めている。また、現在進行形の他地域展開において、統一したアンケートを作成し、実施を行っている。
（C-2）ピアサポートで得た情報の管理方法を医療側から、福祉側から、もしくは企業側から調査を開始し、研究で得られた情報についての管理体制を構築する準備を行う。本目標に関しては、2月6日に参加するとかち財団に、まずは十勝地方の企業側からの調査を共に開始する予定であり、順調にすすんでいる。また、研究で得られた情報についての管理体制構築については、現在第３金曜日に設定した本プロジェクトの定例会議において議題に挙げていく予定である。
実施内容：研究で得られた情報についての管理体制構築については医療情報学専門家との協議を行っている。また、国の医療情報の指針を入手し、その内容をまとめ、定例会議の議題にいれ、話し合っている。

（３）成果
A. 実装グループ：

（A-1）パッケージ化およびリアレンジできるよう、帯広でソーシャルバザール（ピアサポートの情報共有の場）を継続（成熟化および細分化）する。
実施内容：サイトビジットとして2月6日に帯広で「十勝発、マイノリティと共に生きる社会」というソーシャルバザールを開催した。この成功事例をもとに今後のマニュアル化を進めることとし、現在ヒアリングを開始している。

（A-2）滋慶学園グループおよび国際医療福祉大学への展開の準備、実践に入る。本目標以外に新たに他地域展開先として、WithUsプロジェクトを中心に九州栄養福祉大学（北九州市小倉区）、麻生リハビリテーション大学校（福岡市博多区）との話し合いが３月に行われる予定であり、４月以降、北九州の当事者団体への展開（三つのシナリオ）、福岡における他団体への展開の準備をすすめている。
実施内容：北九州市小倉区（九州栄養福祉大学）、福岡市博多区（麻生リハビリテーション大学校）での展開を開始した。滋慶学園グループおよび国際医療福祉大学への展開については、現状維持であるが、福岡北九州地区、博多地区での他地域展開は無事に開始した。今回で得られた知見として、導入はどのプロジェクトでもよく、現地のステークホルダーをいかに巻き込むかが他地域展開において重要なことが再確認できた。
（A-3）他団体、地域への展開を目指すために、３つのシナリオのパッケージ化の準備を行う。
実施内容：帯広とかち地域での他地域展開を成功例として、ヒアリング、マニュアルのドラフト作りを開始した。現在運営に携わる当事者の方々に細かくヒアリングを行っている。マニュアル化を行うにあたり、ただ何を行なったのかではなく、どのような知見でどのようなアレンジが可能かを示していくことで、今度当事者団体に役立つ要素が高いことがわかった。こちらは引き続き時間がかかりそうである。

B. 研究開発グループ：
（B-1）ピアサポートのAIによる解析、評価において2つの課題が明らかになっている。1つは利用可能なデータの制限。ピアサポーターおよび利用者は、会話内容の詳細を第三者に聞かれたくない。もう1つは評価の侵襲性である。ピアサポートの定量的評価は、将来的な報酬化、効果実証に必須ともいえるが、ピアサポーターを傷つけることも予想される。これまで模擬ピアサポートにおいて、会話ではなく、声の分析定量化を行っている。解析モデルの高精度化に加え、実装のために協働実施者と連携し、解析モデルを評価する。同時に、定量化の侵襲性を最小に、効果を最大にするための指針を検討している。
実施内容：ロールプレイングの模擬ピアサポートに対して、エンゲージメント、感情、沈黙、ならびにこれらの変化量を特徴量として解析を行った。エンゲージメントは10名の19-21歳の男女が11,000の音声データを分類し、学習したモデルを生成した。精度は70.2%。感情は1440の会話を8つの感情にラベリングしたRAVDESSデータセットを用いて生成、精度は66%である。当初は、バイアスがかからないように実際のピアサポートで行う予定であったが、医療情報について知見を深めていく上で、最初はバイアスがかかっても模擬（募集して）で行うことが必要だとの認識になった。20代男女8名による模擬ピアサポートでのデータを60生成。学習モデルを生成した。精度は76%。もっとも寄与が大きいものは、エンゲージメントであることが明らかになった。

C. 実体調査グループ:
（C-1）これまでアンケートやインタビューによる調査でピアサポート実態を把握し、効果や課題について分析してきた。その結果から見えてきた、継続や継承という課題、専門職の関与への希求、疾患や障がいによる差異や同質性、ピアサポーターのトレーニングの必要性などに関して、さらに踏み込んだ調査を行い、当事者のニーズや「ホンネ」のリアリティを明らかにし、ピアサポートの体制づくりに寄与するエビデンスを作っていく。また、国内では福祉の分野では先行してピアサポーターの養成並びに資格化が進んでおり、海外ではピアサポートに類似する制度の導入（社会的処方やAdult Foster Careなど）が実践されているので、その状況を詳細に把握していく。本研究には新たにお茶の水女子大学の太田副学長、土山准教授および3年生の学生が参画することとなった。とくに土山准教授はテキストマイニングが専門であり、これまでのインタビュー解析、今後のアンケート調査やインタビュー解析を分担者の細田や協力者の楠田と共に進めていくこととなった。また海外の事例の把握として、デンマークの高次脳機能障害者のピアサポートグループの実践が、体系的で持続可能なモデルとなると考えられるので、視察を踏まえて本プロジェクトへの示唆を検討する。
実施内容：これまでのインタビュー結果をもとにテキストマイニングを開始するためのふるい分けをおこなっている。テキストマイニングについて、これまで集めたインタビューを改めて見返すと、意外に専門用語や略語が多く、これらをまず紐解いていくことが必要であった。現在はそれも終わり、解析をすすめている。
（C-2）ピアサポートで得た情報の管理方法を医療側から、福祉側から、もしくは企業側から調査を開始し、研究で得られた情報についての管理体制を構築する準備を行う。本目標に関しては、2月6日に参加するとかち財団に、まずは十勝地方の企業側からの調査を共に開始する予定であり。順調にすすんでいる。また、研究で得られた情報についての管理体制構築については、現在第３金曜日に設定した本プロジェクトの定例会議において議題に挙げていく予定である。
実施内容：研究で得られた情報についての管理体制構築については医療情報学専門家との協議を行っている。また、国の医療情報の指針を入手し、その内容をまとめ、定例会議の議題にいれ、話し合っている。ピアサポートの情報がどこまでが医療情報でどこまでが開示可能なのか、Bグループとも協議の上、次年度には結論を出したい。

（４）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

当該年度の研究開発は、3つのシナリオ（ソーシャルバザール、WithUs、こえを“かち”にするプロジェクト）の実装と展開を中心に、パッケージ化と価値評価の精緻化を進めた。目標達成に対しては、帯広でのソーシャルバザール成熟化や福岡・北九州地域での新規展開、AIによる声分析の実装準備、および当事者調査によるデータ整備が概ね順調に進んでおり、当初予定より前倒しで進展している部分も多い。一方で、パッケージの最終的なマニュアル化や、全地域への均質な展開には、当事者団体ごとの文化や資源の差異による調整が必要であり、やや遅れが見られる。
データ・マネジメントに関しては、ピアサポートに含まれる情報のうち、どこまでが医療情報でどこまでが開示可能なピア情報であるかの整理が課題となっており、医療情報学専門家と協議を重ねた。現在、国の指針との照合を行い、個人情報保護の観点を踏まえた管理体制の構築を進めている。

市民・住民等との交流については、ソーシャルバザールを通じた当事者・市民の対話の場づくりに加え、大学や行政、企業といった地域ステークホルダーとの継続的なエンゲージメントを実現した。特に帯広・北九州・福岡では、地元大学や行政、議員等を巻き込んだ対話を定例化し、プログラムの地域適応性が高まった。
各実施項目の成果を俯瞰すると、「導入フェーズでは技術や内容よりも“担い手との関係構築”が成功の鍵である」ことが明確となった。また、AI解析では“声の特徴量”とピアサポート効果の相関が明示されつつあり、定量的効果評価の道筋が見えてきた。実体調査では専門職の関与の重要性や、制度的継承の必要性が明確になり、今後の人材育成方針に反映される。サイトビジット等からは、「パッケージ内容のマニュアル化」「社会的インパクトの可視化」についての指摘があり、これを受け、ヒアリングの強化や当事者視点からのアレンジ指針の記述を進めている。
次年度に向けては、（1）マニュアルの完成と出版準備、（2）AI定量化の更なる精度向上と実地導入、（3）法人設立に向けた事業継続スキームの確立が主な課題である。特にパッケージ化については、現場ごとの調整可能な“柔軟性”と“共通性”を両立する構成が求められるため、標準化と地域性のバランスをとる必要がある。

＜課題解決方法の検討内容＞
各地域の実践事例をもとに、共通要素とローカル特性を抽出。コアパッケージ＋地域アレンジ型マニュアルの２層構造とし、当事者ヒアリングを反映させる。

２－３．会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024/12/20	第1回定例会議	Zoom	・自己紹介 ・ソリューション創出フェーズの説明 ・現在進行形プロジェクトの紹介
2025/1/17	第2回定例会議	Zoom	・自己紹介(初参加の方) ・とかちソーシャルバザールの話 ・インタビュー解析について ・3月の九州訪問について ・プロジェクトの進捗状況について
2025/2/21	第3回定例会議	Zoom	・十勝ソーシャルバザールの報告 ・3月の九州訪問について ・プロジェクトの進捗状況について
2025/3/21	第4回定例会議	Zoom	・自己紹介(初参加の方) ・プロジェクトの進捗状況について ・3月の九州訪問について ・助成金応募について
2025/4/18	第5回定例会議	Zoom	・自己紹介(初参加の方) ・プロジェクトの進捗状況について 帯広、福岡、小倉の３つの他地域展開 ・助成金について

３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況

Aで行われている展開について、十勝帯広地域での展開については、ソーシャルバザール、WithUs含めて研究終了後に自走できるように現在株式会社マクニカに入っていただき、システム構築中である。具体的には、イベント終了後に地元企業と当事者の懇談会を有料で行うなどの事業をすすめている。九州で進めている展開（福岡博多、北九州小倉）もソーシャルバザール、WithUsをセットとして事業化を目指しており、こちらはPwCが入り事業化の可能性を探索している。また本研究の社会実装のマニュアル化はACEプラスと進めており、書籍化を目指している。

４．研究開発実施体制

（A）実装グループ
１：北原秀治「東京女子医科大学・研究代表者」（A兼任リーダー）２：稲野辺奈緒子「東京女子医科大学・コーディネーター」（A兼任リーダー）３：宿野部武志「一般社団法人ピーペック・協働実施者」４：水口迅「NPO法人みんなのポラリス・研究分担者」４：葉山靖明「NPO法人学びあい・分担者」5：杉山絢子「一般社団法人CANnet・腫瘍内科医」6：原口唯「株式会社Youi」7：細田徹「榊原記念病院・循環器内科」8：土肥栄祐「国立精神・神経医療研究センター」9：松居彩「金沢大学」
既存のシナリオを成熟化させつつ、シナリオのパッケージ化および他団体、多域展開を実装するもっともマンパワーが必要なグループであり、随時若手研究者が参加する可能性がある。地域との交渉、企業との交渉をおこない、地域展開のコーディネート担い手が参加するグループでもある。
（B）開発グループ
１：三木則尚「慶應義塾大学・研究分担者」（Bリーダー）２：長友竜帆「慶應義塾大学・若手研究者」３：毛利秀巳「株式会社秀和ウェイブシステム」4：笠淑美「一般財団法人ウェルネスサポートLab」5：米澤拓郎「名古屋大学」６：北原秀治「東京女子医科大学・研究代表者」
本プロジェクトを実現するための技術開発、メタバースならびにAIをピアサポートに実装するための研究開発を行う。本プロジェクトではメタバースの開発者も加入し、研究協力者、患者と緊密に連携し、実装に向けてテクノロジーをチューンアップしていく。
（C）調査グループ
１：細田満和子「東京大学医科学研究所、星槎大学・分担者」（Cリーダー）２：楠田佳緒「東京保健医療大学」（Cサブリーダー）３：杉原正子「東京医療センター臨床研究センター・精神科医」４：中山奈央子「作業療法士」5：小林幸治「目白大学リハビリテーション科学・作業療法士」6：細田翠「イェール大学医学部」7：長谷川幹「リハビリ医」８：北原秀治「東京女子医科大学・研究代表者」9：三好加奈子、「岡山大学看護学部」
本研究により得られた現状の問題点の分析に基づき、設計された制度、地域コミュニティの中で実践するための場づくりを考慮し、実装グループとともに検証する。
（D）事業継続グループ
研究代表者、協働実施者、コーディネーターおよび分担者、藤井輝：「FUJII法律事務所」

新法人立ち上げの準備を行う。

・その他の研究開発協力者・機関

滋慶学園グループ（福岡、京都、名古屋）、麻生リハビリテーション大学校、国際医療福祉大学、榊原記念病院、帯広市、東京都港区、横浜市、公益財団法人九州経済調査協会、非営利任意団体MPUF 、木村情報技術株式会社、NTTデータ、ANAアバターイン、武田薬品工業、株式会社アビー、福岡県作業療法士協会、日本作業療法士協会、カディンチェ株式会社、株式会社秀和ウェイブシステム、東京女子医科大学病院

５．研究開発実施者

（A）実装グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
北原秀治	キタハラシュウジ	東京女子医科大学	先端生命医科学研究所	特任准教授
宿野部武志	シュクノベタケシ	一般社団法人ピーペック		代表理事
水口迅	ミナクチジン	NPO法人みんなのポラリス		代表理事
葉山靖明	ハヤマヤスアキ	NPO法人学びあい		副理事長
稲野辺奈緒子	イナノベナオコ	東京女子医科大学	看護学部	講師

（B）開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
三木則尚	ミキノリヒサ	慶應義塾大学	理工学部	教授
長友竜帆	ナガトモタツホ	慶應義塾大学	理工学部	研究員
大田能士	オオタタカシ	慶應義塾大学	理工学部	研究員

（C）調査グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
細田満和子	ホソダ　ミワコ	東京大学	医科学研究所	特任研究員
楠田佳緒	クスダカオリ	東京医療保健大学	医療保健学部	助教
小林幸治	コバヤシコウジ	目白大学	保健医療学部	教授
土山玄	ツチヤマゲン	お茶の水女子大学	共創工学部	准教授
田中菜織	タナカナオリ	お茶の水女子大学	生活科学部	学部生

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

６－１．シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2025年	とかちソーシャルバザール	NPO法人みんなのポラリス	帯広畜産大学	80名	マイノリティーと共に生きるをテーマに情報共有の場を開いた。

６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

（１）書籍、フリーペーパー、DVD
・脳卒中の社会学、細田満和子、青海社、2024年3月
（２）ウェブメディアの開設・運営、
・ピアサポートDX、https://peersupportproject.weebly.com/、2023年3月立ち上げ
（３）学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
なし

６－３．論文発表

（１）査読付き（ 1 件）
●国内誌（ 0 件）
●国際誌（ 1 件）
Hosoda, M. (2024). Transforming the Patient-Provider Relationship Through Digitalized Peer Support in Japan. *Health Systems & Reform*, *10*(2). https://doi.org/10.1080/23288604.2024.2392306 (Published online: 22 Oct 2024)

（２）査読なし（ 0 件）

６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（１）招待講演（国内会議 0 件、国際会議 1 件）
・Community Health and Local Resources: The Case Study in Japan for Protecting the Health of the Planet and Human, Asia Pacific Sociological Association(APSA) Conference 2024,October 26-27, 2024, Venue: Hasanuddin University, Indonesia, Theme: “Global Resilience: Thriving Amidst Planetary Challenges for a Sustainable Future”
（２）口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 1 件）
・Effectiveness and challenges of peer support as a supportive relationship between patients in Japan, The 53rd ARNOVA, November 23, 2024, Washington DC
（３）ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

６－５．新聞報道・投稿、受賞等

（１）新聞報道・投稿（ 4 件）
・2024/11/27 十勝毎日新聞

・2024/12/5 十勝毎日新聞
・2025/2/5 十勝毎日新聞
・2025/2/13 十勝毎日新聞

（２）受賞（ 0 件）

（３）その他（ 1 件）

・メールマガジンｍ３連載
「医療における患者のチカラ」 https://www.m3.com/news/iryoishin/1101942
地域における集まる場所づくりで「孤独死・孤立死」を防ぐ―「キッチンたんぽぽ」「ほっちのロッヂ」の取り組みに学ぶ、2024年10月6日

６－６．知財出願

（１）国内出願（ 0 件）